

## 白い光

大沼晶子

目に痛いような白い光  
並んで話したのは  
もうすぐ生まれる子どものこと  
ようやく幸福になれると思った  
なのに白い夏の光を背に  
あの人はひとり手の届かないところへ  
幾度も同じ夏を越え  
白い光を見るたび思う  
あの人が遠い地で  
未だふしあわせでいることを  
なぜこんな悲しいことが  
絶えず同じ傷あとをたどるかなしみ